あの一冊 この一冊



『長くつ下のピッピ』

（岩波書店）

作家　村中李衣（むらなかりえ）

小学校三年生になって間もない日のことでした。単身赴任をしていた父が、珍しく、まっしろい包み紙に包まれた贈り物を持って帰ってきました。なんだろう、なんだろうと、どきどきしながらシャリシャリの紙を開きました。すると、いきなり今まで見たこともない、奇妙ないでたちの堂々とした女の子が現れました。おまけにその子の右腕には、パナマ帽をかぶったおサルが抱かれています。本の帯には「世界一つよい女の子」とありました。

世界一つよい？それは、ピッピと状況こそ異なれど、父親と離れ、仮住まいが繰り返されていた私には、思いもかけない魅力的な言葉でした。おとなしく、おりこうに、他人から後ろ指をさされないようにと、それまで、自分自身を窮屈（きゅうくつ）に縛っていましたから。

読み進めていくと、一見破天荒にみえるピッピの行動には、「自分で自分をきっちり生きる」というさわやかな覚悟が見えました。彼女がサル一匹馬一頭といっしょに住むごたごた荘の様子は、たとえクッキーの粉が床に散らばっていようと、水浸しであろうと、「自分を生きる」という鉄則にかなったとても整った場所に思えました。ああ、ピッピのように生きたい、となんどとなく本を開いて思ったものです。

今大人になって考えると、ピッピは与えられた「家族」や「教育システム」がなかったからこそ、自ら一つずつを問い、確かめ、進んでいけたのでしょう。自分の人生の基地を子ども時代に造ることの大切さを教わった一冊です。

たった一冊、この本を私に贈ってくれた父のことを考えるとき、彼はどこかで私の孤独と、それを支えるのは私でしかないことを知っていたのかもしれないと、そしてそんな父にも深い孤独があったに違いないと、ふと思うのです。